
夜が明けるとき

皆原 紗菜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夜が明けるとき

【Nコード】

N7319V

【作者名】

皆原 紗菜

【あらすじ】

暗闇に閉ざされた世界・ネヴァ。

そこは、長老様の秘術で平和をなんとか保っている世界。秘術が弱まりつつある今、真の平和を求めてラナは異世界へと向かう。

第一話 旅立ちのとき（前書き）

残酷とまではいきませんが、極端にそう言うものが苦手な人は注意して下さい。

第一話 旅立ちのとき

ここは、神の集いし園からはるか彼方に位置する世界・ネヴァ。闇に閉ざされ、光など存在しない世界。

このネヴァには、「異世界の扉」と呼ばれる場所が存在し、そこから異世界に行く事が出来る。

ネヴァを中心とし、その周りに七つの異なる世界が存在する。ネヴァはその他、七つの世界に住む人々とは何の交わりもなく、独自の文明を築いてきた。

このネヴァでも、時空の扉を使ったことがあるのは、長老ただ一人。他の者は異世界に憧れるも、この暗闇の中で生きていく。

「お姉ちゃん、異世界ってどんなトコ？」

まだ幼い妹・アンの手を引きながら、食材の詰まった袋を手にスタスタと歩くラナ。

ネヴァには、光が存在しない。自然の光もなければ、人工の光すらないのだ。

いつも薄暗く、空を見ただけでは今が昼なのか夜なのかさえ分からない。そして他の文明と交わることのなかったネヴァは他の七つの世界と比べ、遅れていた。

争い事が絶えない毎日。

光のない生活は飢えに耐える毎日だ。光がなければ畑を作っても食物が育たない。

動物も減少する。

飢えに苦しむ人々は、短気になり、感情のコントロールが効かなくなる。

だから、こんな風に子供たちだけで、食材を調達に行くのはこのネヴァで一番危険な事なのだ。

「きっと、お外をのんびりと歩けるところよ。」

「へー。」アンは小さな目を輝かせながら言った。

「行ってみたいな。」

小さい頃は誰しもが、夢を見る。異世界に行ってみたい、と。

だが、それを口にする事は成長するにつれて少なくなる。

言ってはいけない事だと言うことが、誰に教えてもらってもなく解かってくるからだ。

ラナも小さい頃は異世界に行きたくてたまらなかった。

今でもそれは変わらない。

異世界には、まだ自分が見た事もない動物や植物、文化がある。

でも、今から八年前、ラナは気付いてしまったんだ。

これは口にしちゃいけないんだって事に。

ラナがまだ七つの時、母に言ったことがある、異世界に行くことが夢だと。

その時の母の顔を今でも覚えている。

子供心にも、言ってはいけない事だと言うことは理解できた。

アンにも、いつか分かる時が来る。

知る時が来る。

まだ、五つのアンは目を輝かせてラナを見つめる。

「お姉ちゃんも、行ってみたいよね？」

「そうね、楽しそうだしね。」ラナは立ち止まり、アンと目線を合わせるように屈んだ。

アンは一段と目を輝かせる。

ラナはそんな妹の頭を撫でた。いつか妹のこんな好奇心に満ちた顔を見ることはできなくなる。

何も考えずに、ただただ夢を見ることが難しくなるかもしれない。この争いの世界で『異世界』と言う他に、いったいどんな夢が見れると言うのだろうか。

「ただいま。」

「ただいま。」

アンとラナは家に着くと、母のいるキッチンへと向かった。キッチンには、鮮やかな金髪をした二人の母・ジェシーが昼食の支度をしていた。ラナたちの髪とは違う。

ラナたちは、二人とも死んでしまった父親に似て栗色の髪。そしてこの世界で一般的な髪の色。

ジェシーのような金髪は探したって、そういるもんじゃない。ジェシーの祖先、つまりラナたちの祖先は異世界の人だと言う噂があった。

事実がどうかはさておき、隣の家のおばさんも、向かいの家に住んでいる若いカップルの二人も、村中にそんな噂が流れていた。

ラナたちが住んでいるのは小さな村だ。噂なんか一日も経たないうちに広まってしまう。

だから、ジェシーはあまり外は出歩かないのだ。

「おかえりなさい。買ってこれた？」ジェシーは手を止め、二人を振り返った。

「うん。でも、この材料で何を作るの？」ラナは買い物袋をジェシーに渡すと不思議そうに聞いた。

買い物を頼まれ、メモを渡された時から気になっていた。

「お母さんもね、小さいときに、よく作ってもらったのよ。」

そう言っただけジェシーは袋の中から野菜をいくつか取り出すと、それを順番に切り始めた。

「ラナ、出来たら呼んであげるから向こうでアンと遊んであげて。」

「はい。アン、行こ？」

ラナはアンの手を引いて、キッチンを離れた。

「アンは、なんで異世界に行きたいの？」

ラナは一人で人形遊びに夢中になっているアンに尋ねた。すると、アンはキョトンとした顔で聞き返してきた。

「お姉ちゃん、異世界に行きたくないの？」

それを聞いてラナは言葉に詰まった。

時に子供は、痛いところをついて来る。アンの目は何の曇りもなくまっすぐ言葉に迷うラナを見つめる。

ラナは何かを言いかけて、口ごもった。

「行きたくないの？」再度アンはラナに尋ねた。

ラナは迷っていた。ここで八年前、自分が母にされたように苦い顔をして、異世界の話しはしてはいけない事を諭した方がいいのか、それとも自分も行きたいのだと正直に話した方がいいのか。

ただ、ひとつだけ確かな事がある。

ここでラナが顔を歪めれば、アンの夢を潰してしまう事になるかもしれない。

自分のせいで、五歳の幼い妹は夢を失ってしまうかもしれないのだ。ラナはキツチンを覗き、ジェシーが聞き耳を立てていないことを確認すると、アンを見つめ優しい声で言った。

「お姉ちゃんもね、行ってみたい。異世界にはね、アンは見た事ないような素敵なものがいっぱいあるのよ。」

アンは、ラナのその言葉を聞いて目を輝かせた。

「アンね、異世界に行ってみたい！」

アンは立ち上がると、その場で両手を大きく広げた。ラナは慌ててそんなアンをなだめる。

ジェシーに聞かれてはまずいからだ。

幼いアンが言うならまだしも、ラナが異世界に行きたいなど口にしたことが知られると非常にまずいのだ。

「いい？アン。異世界はとても素晴らしい所だけど、それだけじゃないの。最も危険な場所なの。」

ラナは、アンの肩に手をのせ、真剣な面持ちで話した。

「危険……？」

アンは首をかしげた。

まだ小さなアンには理解できないのだろう。

「そう。だから一人で時空の扉の向こうに行っちゃダメよ？」

「分かった。」アンは大きくうなずいた。

「二人とも、食事の用意が出来たわよ。」

しばらくしてジェシーが二人を呼びに現れた。

「アン、ご飯が出来たって。行こっか」ラナはそう言って、アンの頭を撫でた。

と、その時

：

バリバリバリ！！！！！！

窓ガラスの割れる音が家中に響いた。

石が投げられて割れたような音ではない。何かもつと大きなもので、叩き割ったような音。

ラナはとっさに近くに居たアンを自分の後ろに隠した。

「ジェシー・ウエストニーはどこに居る！？」そんな声がガラスの割れる音がした方から聞こえてきた。

そして、足音がこちらへと向かってくる。

その足音が大きくなるにつれ、ラナたちの鼓動も早くなる。ラナは母・ジェシーの顔を盗むように見た。

ジェシーは怪しい声の主がやってくるであろう部屋の戸を怪訝な顔で見つめながら、手をゆつくりと、後方にあつた棚に伸ばした。

アンはその場の雰囲気のにまれ、ぐずり始めた。

数秒後、ラナたちがいる部屋の戸が勢いよく開けられた。

そこに居たのは、体格のいい男が一人。

手には拳銃が光っていた。

男は、それを構えると、ジェシーの方へ向けた。

「我々はネヴァ保安局N-3地区担当の者だ。ジェシー・ウエスト

「ニー、一緒に来てもらおうか？」

ネヴァ保安局。通称、ドレシム。

自分の利益しか考えることが出来ない愚か者、という意味らしい。ネヴァの秩序を守り、平和な世へと導く役目を担う、それがネヴァ保安局なのだが、その実態は政府の悪事に手を貸し、出世をもくろむ汚い奴らだ。

「N-3って…？確かココはM-2地区じゃ…」

「おまえ、娘のラナ・ウエストニーだな？確かにココはM-2地区だった。」

「だった？」

ラナは顔をしかめた。

「この地区は、特に治安が悪いからな。他の地区に悪影響を与える前に処分するのさ。」男は不気味に笑うと、銃口を下げた。

「なるほどね。」そう言つて、ジェシーは鼻で笑った。

ラナと、その後ろですすり泣いていたアンはジェシーの方を見つめる。

「保安局は仕事が出来ない自分たちのことは棚に上げて、出来の悪いM-2地区の人間を抹殺しよう…？」

『抹殺』という言葉に、ラナは目を見開いた。

そして、ラナは目の前で対峙するジェシーと大男を見比べた。

「そして、その大量虐殺の罪を異世界人の血が混じる私に被せようって事よね？」

「その通りだよ、ウエストニー。なら話は早い…、私と一緒に来てもらおうか。」男は再び銃口をジェシーに向けた。

「あいにくだけど、私は他人の罪をたやすく引き受けるほどお人よしじゃないのよ。」ジェシーはそう言くと、男の方を睨んだ。

「仕方ないな…。では」

男は、そう言つとゆっくりと銃口の向きを変えた。

「っ…！」

「これで、どうかな？」

男が銃口を向けたのは、幼い妹を背に立っているラナだ。

「お譲ちゃん。お譲ちゃんからも、お母さんに行ってくれないか？」

「まだ死にたくないよ、って」

ラナは助けを求めるようにジェシーに目をやった。

「分かったわ。その代わり、娘たちには手を出さないと約束しなさい。」

「物分かりがよくて何よりだ。」

そう言うと男は安心したのか、一瞬、私たちから目を離した。

ジェシーはその瞬間を見逃しはしなかった。さつき棚から取り出て隠し持っていたのは、見たことのない武器。拳銃のようなその武器を一瞬の隙について、男に突き付けた。

なのに、男は平然と笑っていた。

「おいおい、何の真似だ？ ココで俺を殺しても …」

「分かってます。ココで引き鉄を引いても、家の外には、あなたの仲間が居るんでしょう？ 二言はありません。あなたたちの罪を被ることはお受けします。ただあなたたちの言いなりにはなりません。」

「どう言うことだ？」

男は、顔をしかめた。

「あなたたちの望みを叶えて差し上げます。ただし、私が被る罪は大量虐殺ではなく、今まで保安局のこのネヴァにしてきた裏切りの罪です。」

ラナたちには、難しすぎて意味が分からない。

ただ、今のジェシーは今までに見た事がないほどカッコイイと思った。

「この世界の人々に、今までの保安局の横暴や失態の責任は全て私にあると発表しなさい」

「そんな事をして、一体何の意味があるんだ！？」飛び道具とジェシーの殺気とを向けられ、男も次第に焦ってきたのか、息が荒く、声も上ずっている。

「それを聞いた人々は、私を憎み、嫌うことでしょう。でも、そこ

であなたたちがネヴァに平和をもたらす宝の存在を発表すれば、保安局の信頼は回復するんじゃないですか？」

「宝…？」

「ええ。ご存知の通り私には異世界人の血が色濃く残っています。その私だから分かること、感じる事があるのです。」

「いいだろう。その宝とはなんだ？どこにあるんだ？」

男がそう言うとジェシーは、静かに武器を元の棚に戻した。そして、一度、子供たちの方を見て優しく微笑んだ。

「その宝とは、何物にも代えることの出来ないものだ聞いています。その宝を見つけるカギは異世界にあると…」

「異世界、だと…！」

男は、異世界という言葉に異常なほど反応した。

「ラナを異世界に行かせて、宝をネヴァに持ってきてもらいます」

急にジェシーから名前を言われたラナは、驚いてジェシーの方を見た。

すると、優しくラナを見つめるジェシーと目が合った。

「大丈夫。貴方ならきつと宝を見つけられるわ。」

その言葉を残しジェシーはラナたちの前から姿を消した。

翌日の新聞に大きくこんなことが書いてあった。

ネヴァ保安局は一人の局員の陰謀により支配されていた、と。

そして、その記事にはジェシーの名前と顔写真が載せてあった。

（お母さん、待っててね。私、必ず宝を見つけてくるから…）

ラナは昨日の晩、あの大男に言われていた。

「宝を必ず探し出して、持ってこい。さもなければ、お前の母は一生、牢獄の中で生きていくことになる」

ネヴァに平和をもたらすと言う、何物にも代えられない宝。

母を助けるために、異世界に向かうことを決心した。

「アン。お姉ちゃんね、遠くへお出かけすることになったの。だから、当分の間、おばあちゃんの家にお泊りしててくれる?」

「お姉ちゃん、どこに行くの?いつ帰ってくるの?」アンは心配そうに、ラナの服の裾を握りしめながら言った。

「いつ帰ってこれるか分からないの。お姉ちゃんはね、宝さがしに行くのよ。」

「そっか。宝物、見つかると良いね。」

ジェシーがいなくなつて三日後の早朝。

ラナは異世界の扉を目指して、住み慣れたこの村を離れた。

第一話 旅立ちのとき（後書き）

このお話は、ジャンルの言うところ「冒険」になるのかな？

冒険ものは、書いたことが少ないのでちょっと心配ですが頑張って更新したいと思います。

前書きで書いた「残酷とまではいかない」と言うのが“大量虐殺”という単語です。

その描写がある訳ではないので、前書きで書くだけにしました。

今後お話の展開によっては、そう言う言葉、もしくは描写が出てくるかも知れません。

第二話 消えた村

大陸のずっと西、A-1地区・ネビアにラナの目指す異世界の扉があるのだ。

そこにたどり着くまで、どれくらいかかるのかさえ分らない。A-1地区は他の地区に比べて裕福な人たちが暮らし、治安も悪くない。

A-1地区には、長老が居る。その長老が大陸全土に権力を伸ばす、言わば総理大臣みたいな役割を担う人だ。

長老には秘術を使う能力があると言う話だ。その力こそが、この暗闇に包まれたネヴァであつても、平和を保ち、人々に安らぎと希望を与えていた。

しかし、長老も年老い、秘術の届く範囲も衰え始めた。これまでもいくつもの地区が治安の悪さを理由に抹殺されたと聞いている。昔、この大陸はA-Zの地域に分け、それをまた1-10の地区に分けていたのだが、今はA-Nまでの地域を1-3の地区に分けている。

歩き続けて五時間とちよつと。

「ココどこだろう…？」 3地区を出たあたりから道が分からなくなつてしまった。

ラナは背負つたりリュックから古ぼけた地図をとりだした。目印を見つけようと辺りを見回す。すると、小さな看板が目にとまった。

「ジフウの道…？」 慌てて手に持った地図で場所を探す。

（あれ、『ジフウの道』なんて、載ってないけど…）くまなく探すが、地図のどこにもジフウの道という名前の通りは載っていないかつた。

「何かお困りですか？」

地図を広げ、困り果てていたラナに、背後から誰かが声をかけた。ラナが驚いて、声のした方を振り返ると、そこにはラナと同じ年く

らいの女の子がバスケットを抱えて佇んでいた。

「私、この近くの村に住んでます、リリア・ナニードと申します。何かお困りですか？」

リリアと名乗る女の子は、再度、驚きに顔をしかめるラナに尋ねた。ラナは驚いて、というより、その女の子に見とれてしまつて声が出ないのだ。奇麗な栗色の髪を風になびかせて、かすかにお菓子の甘い匂いが漂っている。

「あ、大した事じゃないんですつ。ちょっと道に迷つちゃつて…。

あの、このジフウの道つて地図に載つてないみたいなんですけど…」それを聞くとリリアは、クスリと笑つた。そして笑いを堪えながら訂正をする。

「『ジフウ』ではなく、『ジャフウ』ですよ。邪な心を封じる、という意味です」

「うそ!？」ラナは慌てて後ろにある小さな看板を見返した。でも、そこには確かにジフウと書いてある。

「きつと、雨にさらされて、色が落ちてしまったんでしょう。」

「でも、ジャフウの道なんてどこにも…」ラナは再度、地図に顔を近づけた。

「私たちの村は ……」リリアはそんなラナを見て俯いた。まるで、みたくない物を見てしまったように表情を暗くした。そしてゆっくりと口を開く。

「え…」ラナは地図から顔を上げた。

「ネヴァの保安局に目をつけられ、村の人々は殺されました。」

リリアは震える声で吐き捨てるように言つた。

三日前、ラナたちの村に保安局員が訪れたように、リリアの村にも十年前、局員が来て村人を殺したそうだ。

そして、生き残つたのは、当時六歳だったリリアと、その村の村長だけだった。

リリアはまっすぐラナの方を見つめている。その目は何か覚悟を決めた、そんな感じの目だ。

なんでそこまでシャンとして居られるのかラナは不思議だった。リリアのまっすぐ過ぎる目を見ると、ラナは圧倒された。

「そんなラナを見ていたリリアは顔をほころばせた。
「ごめんなさいね。こんな暗い話になってしまつて。」リリアは笑つていた。

（強い人…）

ラナは、自分に優しく微笑むリリアを見て、そう思つた。

「どこかにお出かけだったんじゃないですか？」しばらくして、リリアは思い出したように言つた。

「え？」

「道を探していたようでしたから…」

リリアはそう言つと、ラナの持つていた地図を覗き込んだ。

その時、村の方角から六十代くらいの白髪の老人が焦つた様子でこちらに向かつてくる。

その足音に、ラナもリリアも顔を上げた。

「リリア。大変じゃ！また、ドレシムの奴らから通達が来たぞ。明日の正午までに村を明け渡せと…」

話を聞く分に、老人の正体はもう一人の村の生き残りの村長である事はラナにも見当が付いた。老人は息を荒くしてリリアの隣に来るとラナの存在に気付きもしないで、息を切らしながらリリアにこう告げた。

「明日の正午、ヤツ等が来る。それまでに何か手を打たなければ！」

「村長さん、落ち着いて下さい！とにかく村に帰つて、詳しく話を。」
「そう言つて、リリアはラナに軽くお辞儀をすると、動揺で足がおぼつかない村長の背を支えながら、村長が駆け下りてきた坂道を上つていく。

「どれもこれも、あのジェシーとか言う女の仕業かつ！」

「っ…！」

村長からジェシーの名前が出た事にラナの心臓は壊れてしまいそう

なほど脈打った。

憎々しい声で、吐き捨てるように。

「この世界の人々に、今までの保安局の横暴や失態の責任は全て私にあると発表しなさい」

「それを聞いた人々は、私を憎み、嫌うことでしょう」

ラナの脳裏に先日ジェシーの言葉がよみがえる。ラナは拳を握りしめた。

奮い起つ怒りを必死に鎮めようとする。

でも、無理だった。

気付いた時、ラナは叫んでいた。弱々しく坂を上り、自分から遠ざかるうとする二人に。

「何も知らないくせに、分かった風な事言わないで!!」ラナは目到大粒の涙を溜め込んで力いっぱい叫んだ。

二人はその叫び声に立ち止まり、振り返った。

「では、そう言う貴方には、私たちの気持ちがかかるのかしら?」

さきに、冷たい声でラナに反論したのは村長ではなくリリアだった。さっきの会話からは想像も出来なかった口調、冷たい視線にラナは、たじろいだ。

「え...?」

あまりにも情けない声を出してしまった。

「ちよつと来て。」

ラナは二人について、坂道を上って行った。

途中に井戸があってもう何年も使われていないようだった。その井戸を食い入るように見つめるラナに気付いて、ラナの少し前を長老の背を押しながら歩くりリアは言った。

「私たちの村はE-4・ミラ村と言います。」

「ミラ：村？」そんな名前の村、さつきラナの広げていた地図には載っていないかった。

「十年前、保安局員たちによつて、この世界から消された村です。そしてこの十年間、村を明け渡しと言う通達を無視し続けてきました。もちろん拳銃を持った局員が村に来て脅された事もあります。」しばらくすると、村が見えた。

二人に連れられ、中に入るとそこには人気もなく物静かだった。

「これが村？」ラナは目を疑った。

がれきが散乱し、雑草が生い茂り、民家が無残な形で残っているだけだ。

ラナは慌てて二人を見る。

二人は村を悲しそうに見つめながら言った。

「十年前、保安局員がやってきて、何もかも壊して行きました。私たちは、何も出来なかった。目の前で住み慣れた村が壊されていくんです……」

「この村は、この政府に殺されたんじや。なぜネヴァの平和を守る保安局がドレシムと成り果ててしまったのかのお……」

（こんな事まで……）ラナは辺りを見回した。目に大粒の涙を溜め込んで……

自分たちの村もこうなっていたかもしれない。自分の母があの時、取引をしなければ、あのまま村は殺されていたかもしれない。母が守ってくれたあの村を、私が平和にするんだ。そしてネヴァを、この人の心までを闇で包んでしまったこの世界を、私を変えて見せる。

ミラ村の悲惨な景色を見つめながらラナは心に誓った。

「私の名前はラナ・ウエストニー。M-2地区・ヤマナ村から来ました。」

ラナが招き入れられたのは、村の一番奥の村長の家。その部屋の一室、客間のような部屋にラナは通された。二人とは机を挟んだ向か

いに座ったラナは自分の名前を恐る恐る口にした。

「ラナ…ウエストニー…？あいつの娘か…！？」その言葉を聞いて、リリアと村長は、怒りに顔をゆがませた。そして村長はラナの顔を見つめ吐き捨てた。

お前の母は人殺しだ、そう泣き叫んだ。

「ソナを、孫を返せ！！ソナはお前の母親に殺されたんだ。」

「村長様！落ち着いて下さい。お身体に障りますよ？」慌ててリリアは机から身を乗り出す村長を気遣う。そして、村長の剣幕に押され、顔を青白くさせたラナを見つめ、優しい口調で言った。

でも、その言葉は泣くのを我慢したような、悲しい声だった。

「貴方は、私たちに『何も知らないくせに』と言いましたよね？でしたら、私たちには真実を話して下さいと受け取って良いのですね？」

「はい、全てお話しします。」そう言ってラナは、姿勢を正した。

それを見た村長は仕方なくといった様子で、ソファアに腰を下ろした。リリアも次いで腰を下ろす。

ラナは話し始めた。

ココに来るまでに起こった出来事を。

ただ、ジェシーに異世界人の血が混じっている事は言わなかった。もし話したら、異世界に対する偏見が生まれるだろう。ラナの役目はネヴァに平和を取り戻す事。

なのに、ジェシーに異世界人の血が混じってるなんて言ったら、そのほつれがだんだん大きくなって、いづれは、世界と世界の大戦争になるかもしれない。

そんなことは絶対あってはならない。それにジェシーの娘であるラナにも異世界人の血が混じっている事になる。私はこんな所で立ち止まるわけにはいかなかった。

「では、貴方の母であるジェシーさんはネヴァに平和を取り戻すために、わざと保安局の身代わりになったと言うのですか？」

「はい、私は母からこの世に平和をもたらし何物にも代えられない大切な宝を見つけて来いと言われました。」

「宝？」二人はキョトンとした顔でラナを見つめる。

「そんなもの、あるわけがないじゃろう。あればとつくの昔に、このネヴァは平和な世になつとるよ」

村長はこんな話は馬鹿げているとでも言うように、その場を離れて言った。

残されたラナとリリアの間に沈黙が流れる。

(この人からは逃げられない…)

ラナは目の前で自分をじっと見つめるリリアの熱い視線を感じながら思った。

(この人は、私の話を疑っている。でも、否定もしていない…。)

「宝というのは…」

「え？」

「宝が見つければ、この世界には平和が訪れるんですか？」

沈黙の中、リリアはゆっくりと口を開いた。

その目には、かすかな希望の光が映っていた。

「はい。母は確かに宝はこの世に平和をもたらし、と言っていました。そして、私はその宝を探しているんです。」

「そうですか…。あ、うちも、もうすぐ昼食なんですが、一緒にどうですか？」リリアは時計を見てから、にこやかに言った。

「良いんですか！？…実は朝から何も食べてなくて。」

ラナはリリアの好意に甘えて昼食をご馳走になることにした。

「あの、リリアさん。村長さんは？…ここ村長さんの家なのに……」食事の途中、ラナは言い難そうに、小声でリリアに尋ねた。すると、向かいに座っているリリアは無理に笑って見せた。

「気にしないで下さい。少し…少し気が立っているだけですし、二階で少し休めば、きっと村長様も分かってくれるはずですから……」そう言ってリリアはまた箸を進める。

その手がかすかにふるえているのにラナは気が付いた。

（強い訳じゃないんだ…）

「ソナは…」

「え？」

「ソナは私の初恋の男の子なんです。十年前、保安局員がこの村にやって来た時、彼は17歳。村人からも評判は良くて、彼が村長になるなら、この村はもっと明るく活気のある村になるだろうと…。でも、ソナは十年前、私を守るためにわざと局員の気を引こうと、拳銃を構えている局員の前につび出して、亡くなりました。」話し終えると、リリアはラナの目を見て言った。

「私も、このネヴァを平和な世にしたい。この村がそうだったように、皆が助け合い、笑いあえる世を。だから、私に出来る事があるなら協力します。」

その言葉を聞いてラナはなんだか心強くなった。自然と笑みがこぼれる。

「ありがとう、リリアさん。では、さっそくなんですが…」そう言うってラナは、机の上に地図を広げた。

そして、今、自分たちが居るミラ村のだいたいの位置を指さした。

「たぶん、ここがミラ村だと思うんです。ここから西にあるA-1地区・ネビアに行きたいんですが…」

ミラ村から、ネビア村に向かってまっすぐ指を動かす。

「でしたら、この村の前のジャフウの道を通って南に迂回して行けば、C-2・ザルバ村まで一本道です。」リリアはネビア村から少し離れた地点を指さした。

「迂回？何かジャフウの道の先にあるんですか？」ラナは地図を使って説明をするリリアの顔を見つめた。

「あの先には大きな川が流れていて、渡るには少し難しいかと…。船があればその川の流れを利用して、いつきにネビアまで行けるんです…」

「へー、その川ってネビアにつながってるんですか？」

「はい。…でも、気をつけて下さいね。」笑うラナにリリアは心配そうに言った。

「何をですか？」

「長老様、保安局にお命を狙われているとか…」

「保安局に!？」

ラナは勢い余って立ちあがった。ガタガタツと椅子を引きずる音が響く。

「あ、いえ。正確には政府が保安局に指示を出し、長老様の暗殺をもくろんでいるという噂がありました…」

リリアはそう言って、ラナに落ち着くように促す。二階で休んでいる村長を起こさない様にラナは静かに椅子に座りなおした。

「そうなんですか…。政府がいよいよ長老様にまで。」

その時、家の外から馬の鳴き声が聞こえた。

そして、複数の男の声が重なって聞こえる。嫌な予感がした。

二人は慌てて、立ちあがった。

こんな荒れ果てた村に來客が来るわけがない。来るとしたら…、あいつ等しかない。

数秒後、二人の予想は的中する。

ダイニングのドアを蹴破るように入ってきたのは、保安局の制服に身を包んだ男たち。

そして、先頭に立っている男は二人にこう言った。

「さあ、村を明け渡してもらおうか。」

「約束の時間は明日の正午のはず!」リリアは強い口調で言った。

「チッ! あいつ、しくじりやがったか」男は憎たらしそうな顔で舌打ちをした。

そして、ニヤニヤと笑いながら言った。

「悪いな。こちら側にも手違いがあったようだ…。なにせ、ココに來て十年になるからな。」

「どう言うこと…?」

リリアは額に嫌な汗を掻きながら男に尋ねた。そんなリリアを見て後ろにいた男たちはケラケラと笑い始めた。

ラナは顔をしかめた。

（まさか …）

「こつ言つ事じゃよ。」そう答えるのは、二階で休んでいたはずの村長。

階段を一段一段ゆっくりと下りながら言った。

「村長様!？」

第三話 死ぬ覚悟

「村長様、一体これはどう言う事ですか!？」

ミラ村の村長の家。

階段を下りてきた村長は、無表情で茫然と自分を見つめるリリアに言った。

「わしは、保安局の人間だ。十年前、この村を襲った一人だ。」

村長の顔は、だんだんと悲しみに染まっていく。そして、リリアに近づこうとした村長の肩を、一番前に居た局員のが掴んで引き止める。

「襲った村の生き残りを何の手だてもせず、十年間も放っておくわけないだろう。」村長の肩を掴んだ男は、リリアに笑いながらそう尋ねた。

「なあ？」そして、村長の顔を覗き込む。

村長は悔しそうに、唇を噛み、拳を握った。

「本当…なんですか？」

リリアは目に大粒の涙を溜めながら村長に尋ねた。

「本当だ。こいつの言った事は、全てな。だが…」村長はそう言つて、自分の肩にのっている男の手を捻りあげ、男が怯んだすきに上着に忍ばせた拳銃を男に向けた。

「行け!逃げるんだ、早く!」

村長は、叫んだ。

「っ!」リリアは目の前の光景に足がすくんで動けない。

リリアの足が震えているのに気が付いたラナは、咄嗟にリリアの右手を握った。

それに気づいたラナは驚いたように振り返る。

「リリアさん。こっち!」

「でも…!」

リリアは、その場を離れようとしなかった。心配そうに男たちに銃

口を向ける村長の背中に目をやった。

「リリアさん！」

ラナの手に力が入る。

それでも、リリアは動こうとしない。ただ、首を振るだけ。

「やれやれ、仕方がない。おい、お前ら、撤収だ！」男は後ろを振り向くと部下たちに言った。部下たちもその命令に従いそそくさと家から出ていく。

「！？」

ラナとリリア、そして村長は驚いて顔を見合わせた。

その様子を見て、男は言った。

「俺たちは、重要な任務を上から任されているんだ。正直、お前たちと遊んでる暇はないんだよ。」そして最後に男は、嫌味っぽく「村長と長老じゃ偉い違いだしな。」と言い残し、外に出た。

その言葉の意味を理解した三人は、慌てて男たちを追って家の外に出た。

村の入り口まで追ってきた三人だったが、もうすでに、男たちは長い坂を下り、ジャフウの道を南へ進んでいた。

「まさか、あの人たち……」

「ええ、たぶん。ネビアに向かっているんでしょう……。長老様の命を狙いに。」

ラナとリリアは、遠ざかる保安局員の背中を見つめながら焦った。今から追いかけても、相手が馬では追いつけはしない。

「舟だ！この先の川を船で進めばヤツ等よりも先にネビアにたどり着ける。」そう言っ村長は、ラナとリリアについて来るように促した。

連れてこられたのは、村の入口から少し村を入った所にあった倉庫。村長は倉庫の戸を重そうに開けた。もう何年も使っていないようで、倉庫の中は大量の埃を被っていた。

「この舟なら、あの川の急流にも耐えらえるだろう。」

そう言っ、村長は倉庫の奥で埃を被っている木造の舟に近づいた。

ラナたちも鼻と口を手で覆いなが、村長に続き、倉庫の中に入る。その舟の埃を払い、三人がかりで倉庫の外に運び出した。

「川までは、この台車で運ぼう」

村長は倉庫の中から大きな台車を引きずってきた。三人は舟を台車に乗せ、村を出た。

「なんで、貴方は自分の身内である保安局員を裏切るんですか？」

川に舟を運ぶ途中、ラナは台車を押す村長に尋ねた。

リリアはその言葉にそつと聞き耳を立てる。

「保安局のヤツ等がみなドレシムに成り果てたわけではない…。ネビアにあるネヴァ保安局総本部の中にも、ネヴァを愛し、更正させようとしている者は存在する。」

ラナはその言葉に驚き、戸惑った。

ラナの知っている保安局員と、今、目の前にいる保安局員の老人の人物像がどうしても重ならないからだ。保安局員とは、政府の悪事に手を課し出世をもくろむドレシムだ、そう思ってきた。でも、違った。

保安局員の中にも、この世界の平和を心から願っている局員もいるんだ。ラナやリリア、この世界に住む一般の人たちと何ら変わらない思いを抱いて、今こうしてこの世界の行く末をどうにかしようと奮闘している局員もいるのだと。

「村長さん、ありがとうございます。」

ラナからの突然の感謝の言葉に、村長は驚いてラナの方を見る。

「なぜ、私に礼を言うんだ？」

「希望が持てたから…」ラナはそう言って、隣を歩く村長に微笑んだ。

「この世界も悪くないかもって。」

それを聞いた村長とリリアは、顔をほころばせた。

ジャフウの道を西へ二十分。

激しく水が流れる音が聞こえ始めた。

「この流れに乗って、舟を進めれば、二日もあればネビアに着く。」
そう言って村長は川を覗き込み南側を指差した。

「途中、E-1地区・コバ村で睡眠をとれ。舟の上での睡眠は命取りだからな。」

「はい、わかりました」

ラナはそう言って、流れの激しい川に浮かべた舟に乗り込んだ。

舟の中に足を着いたらラナは、少し緊張していた。この舟に乗って、ネビアに向かう。

舟を出してしまえば、この急流の中、もう後戻りはできないだろう。
「気を付けてくださいね。ネビアに着いたら、長老様に伝えてください。局員たちが確かに長老様のお命を狙っていると、噂などではないのだと。」

「はい、必ず伝えます。」

「向こうに着いたら、ビル・アルドナを訪ねると良い。保安局総本部の局員だ。きっと力になってくれるだろう。」

ラナは、頷いた。

それを確認したように村長は頷き返すと、船を岸から離れた。
舟が流れに乗り、二人から遠ざかる。

「村長さん、リリアさん、ありがとうございました！きっと……きっと、宝を見つけて、このネヴァを平和な世にして見せますから！！」
ラナの姿が見えなくなつて、リリアは村長に訪ねた。

「村長様、この世界に平和をもたらず宝なんて、本当にあるんでしょうか？」

「さあな、それは分からないが……、もし本当に宝があるのだとしたら、それは……あの子にしか見つけれない物かもしれないな。」

村長はラナの姿が消えた、川の流れを細めて見つめた。

その目は希望に満ちた目だった。

「村長様。私、今の村長様の方が好きですよ」リリアは微笑んだ。
「サンダナだよ。私はサンダナ・ヘルンだ。」

村長はリリアを見つめ、言った。

「もう、私は村長ではない。」

無理に笑っている、そんな悲しい顔だった。

「いいえ、村長様。村長様は村長様です。この十年間、一緒に村を守って下さったじゃありませんか。」

リリアと村長は顔をあわせて微笑んだ。

一方、川を下り始めたラナは早速、笑っては居られない状況に陥っていた。

予想以上に川の流れが速く、舟に慣れていないラナは倒れる寸前だった。

「うええ、気持ち悪い…」ラナは舟の中に座り込み頭を抱えた。

舟に揺られること、一時間。次第に流れも緩やかになってきた。ラナに乗せた舟は森の間を縫うように進む。薄暗くて、オバケが出て来てもおかしくないほど不気味だった。

（この森、なんか不気味…）

その時、ラナは森の奥に人影を見つけた。

一瞬、ラナは幽霊を見たと思い、気分が悪いのも忘れて、勢いよく立ち上がった。

ガタツ　　。

一瞬のうちにして、ラナの体は大きな水しぶきと共に、川へ落ちてしまった。

幸いなことに船は転覆しなかったので、船の上のリュックは濡れなかった。それでも、服がビショビショになってしまったらラナは、この不気味な森に舟をつけ、岸に上がって服を乾かすことにした。初めから長旅の予定だったので、着替えはリュックの中にあっし、保存食もいくつか備えていた。濡れた服を、木の枝と枝との間に渡したロープに干して、ラナは新しい服に着替えた。

「なんかヤダな、ここ…」ラナが怯えたように辺りを見回すと、何か黒い影が動いている。さっき見た人影のようだった。

人影は段々とこちらに近づいてくる。

「あの！…」怖さのあまり、先に声をかけたのはラナの方だった。人影は立ち止まると、震えた声のラナに優しく言った。

「こんなところで、何をしているんだ？」男の人の声だった。

「え…あ、あの…」

口ごもるラナに、男は近づきながら言った。

次第に男の顔もはつきりと見えるようになった。

目鼻立ちのくつきりした、体格のいい無精ひげの男だ。年は二十歳前後。

男は、ラナの奥に見える木造の船と、干してある服に気付いて心配そうに言った。

「大丈夫か？ココは夜になると冷えるからな。うちに来い。」男は、戸惑うラナの腕を引っ張った。

「え！？あの…」

言われるがまま、ラナは男に連れられ、森を抜けた。そこは、さっきまでいたミラ村と違い、活気にあふれ、中央広場には大勢の村人がいた。

その中央広場を突きつて、ラナが連れてこられたのは一軒の大きいお屋敷。

真っ白なその外観を見つめ、驚きに言葉を失うラナに男は言った。

「ココはわりと治安が良いんだ。ココはネヴァ大陸の西部、ネビアからもそう遠くない。だから、ゆっくり休んでいくと良い。」

「貴方は、いったい…」ラナは恐る恐る聞いた。

「俺はジビル。ジビル・カートンだ。この村で医者をやっている。」男はジビルと名乗り、ラナを屋敷に招き入れた。入った所は吹き抜けになっていて、そこには二階に続く螺旋階段があった。

その時、二階でかすかに物音がした。

「他にも誰か住んでるんですか？」ラナが不思議そうに尋ねると、

ジビルは慌てたように言った。

「まさか。俺は一人暮らし。二階は診療所に使ってるから、患者が寝てるんだ。」

「そ、そうなんですか…」ラナはジビルの慌てように少し驚いたが、特に気にもしなかった。それにしても、この大柄で無精ひげの男が医者だなんて、人は見かけによらないものだと感じながら、ラナはジビルについて居間のテーブルを挟んだ向かいの椅子に腰かけた。「今晚は、ここに泊っていくと良い。」そう言うと、ジビルは椅子の背もたれに体を預け、大きなため息をついた。その姿はまるで山賊か何かのようだった。

「あの…、ジビルさん。私、明日の夕方までにネビアに行きたいんですけど…。」

すると、ジビルは驚いたように目を見開いた。目の色が変わった感じがした。

「ネビアに何か用でもあんのか？」

「ええ、まあ…」

ラナは愛想笑いで誤魔化した。もちろん、宝の事をむやみに言いふらしたくないのもそうだが、ラナはジビルに何か…、得体の知れない何かを感じていた。

「ところで、なんであんな森ん中に居たんた？舟で川を下って来たんだろ？」

男は机から身を乗り出して言った。ラナは、ネビアの事を口に出してからジビルの態度が微妙に変わったような気がしていた。

「あの、そんな事より…二階で寝てる患者さん、放つといいんですか？さっきから二階の方で物音が…」ラナは耳を澄ます。二階から、ガタン…ガタン…という物音と、それにかき消されるほどの小さなうめき声らしきものが聞こえた。

「そうだな、様子を見に行ってみるか…」ジビルは面倒臭そうに席を立った。

「あんたはそこに居てくれ。すぐ戻ってくるから」

ジビルはそう言うと、今を出て言った。部屋を出たジビルは険しい顔になるとゆっくり階段を上がって行った。二階には三つの部屋があつてジビルは物音のする部屋のドアの鍵を開けた。

そこは、広い寝室のような部屋だった。

「往生際がわりーな、あんたも。」

不気味にそう言いながら、ジビルは部屋の中に入った。部屋には中央に大きなベッドが一つ。そのベッドには一人の女性が腰を下ろしている。

女性は、自分を嘲笑うジビルを睨んだ。その目からは疲労困憊の色がうかがえた。

「わたくしをどうなさるおつもりですか？」

「な」に、他愛もない。あんたを餌にあんたの親から金をもらうつてだけのこつた。「ジビルは女性に近づくと自分の事を睨む女性に顔を近づけた。

「あんたの親は、あんたにいくらつけるだろうな？なあ、ネビアのお姫様……。クッククックク……」

「貴方なんかに払うお金なんてありません！貴方のような犯罪者に……」ジビルは反論する女性の顎を掴んだ。

「どの口が言つてんだ！？よくそんな口が聞けるな。殺されないのか！！ああ！？」ジビルは、女性の毅然とした態度に腹を立て、叫んだ。

「わたくしを殺せば、家からの身代金は奪えないのではないですか？わたくしが死んで家の名誉が守られるのであれば、わたくしはこの場で死ぬ覚悟です。貴方のような人にお金を渡すなんてエンデマー家の恥です……」

女性はジビルをさらに目をキツクして睨んだ。

「そんな覚悟が出来ているのか……。大したもんだ。お望み通りそうしてやろう。ついさつき新しいカモを見つけた……。エンデマーからの身代金がおじやんなれば、そいつから金お奪えば良い。」そう言つて、ジビルは隠し持っていたナイフを振りかざした。

「あの世でプライドの高い自分を恨むんだな！」そう叫びながら、ジビルは女性に向かってナイフを振り下ろす。その瞬間、部屋のドアが勢いよく開いた。
「待ちなさい！！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7319v/>

夜が明けるとき

2011年10月8日17時22分発行